



「無肥研だより」第4号をお届けいたします。今回は、3月に行われました無肥研総会・研究報告会・懇親会、JAたじまコウノトリ育む農法実施者などへの講演、きょうと地域力アップおうえんフェア、理事会で選任された新理事長について、ご報告させて頂きます。

★ 活動報告

1. 通常総会・研究報告会・懇親会（2018年3月18日）

無肥研の通常総会が2018年3月18日午前10時半より正会員77名（委任状提出者を含む）の出席のもと開催されました。石田靖久会員が議長をつとめ、2017年度の事業報告・決算報告、2018年度の事業計画・予算案、NPO法の一部改正に伴う定款変更が審議され、いずれも原案通り可決されました。また、任期満了に伴う役員の改選も行われ、今年6月から2年間の任期で、理事に堀江武氏・白岩立彦氏・棄田光雄氏・小林正幸氏・長谷川淳一氏の5名が、監事に椿野則之氏が選任されました。その他、事務連絡などがあり、11時半に閉会しました。



午後1時から開催された2017年度無施肥無農薬栽培調査研究報告会には、研究者・生産者・流通関係者など100名を超える参加者が集いました。人間の生存を維持するために不可欠な食の生産を担う農業は、環境



と密接にかかわっています。環境の変動が大きくなる中での安定した収量確保、環境にやさしい農業生産、農業が持つ環境保全機能など、日本の農業にはいくつかの課題が指摘されていますが、それらは無肥研の活動と大きな関わりがあります。



研究報告会では、無施肥無農薬栽培（以下「無施肥栽培」という）について、無肥研、京都大、奈良先端大、立命館大の研究者から口頭発表が6題、資料報告が1題ありました。無施肥栽培では安定した収量確保のためには、栽培環境に適した品種の選定、生育状況に合った灌漑水の管理、雑草の処理が大切だと改めて報告されていました。生育後期の生長を促すために生育前期の生長を抑えた深水栽培の調査報告や、生育期間の長

い品種は、年次や水田の違いにかかわらず収量が高い傾向が見られ、無施肥栽培に適していることを示す報告もありました。また、微生物の面から長期無施肥栽培圃場の特異性を示唆する現象も見られ、無施肥栽培という特殊な環境での微生物の動きに興味を示す意見もありました。それぞれの報告に対して、色々な栽培法を実践する生産者や研究者などとの間で質疑応答も活発に行われ、今後の調査への期待や要望など発展的な意見が多く出されました。無施肥栽培の実施例や研究例は限られており、収量を含む様々なデータを記録していくことは、将来の農業生産にとっても非常に有意義だと評価されていました。



報告会終了後に行われた懇親会には 77 名の参加者があり、報告会に引き続き活発な意見交換が研究者・生産者・消費者の間で行われました。予定の時間を過ぎても、多くの方が熱のこもった話し合いを続けておられ、交流の輪が広がっていく様子が見られました。無肥研活動のさらなる発展が期待される会となりました。

2. たじま農協コウノトリ育むお米生産部会による栽培研修会での講演 (2018 年 3 月 1 日)



2017 年 8 月 21 日に兵庫県豊岡市のコウノトリ育むお米生産部会や JA たじま、豊岡市・兵庫県の職員等、57 名の方々が、無施肥栽培水田圃場を視察・研修（会報第 2 号に掲載）されたことが縁となって、2018 年 3 月 1 日に JA たじま豊岡営農生活センターにおきまして、コウノトリ育む農法実施者の皆様を始め、農協職員・県の改良普及所の方々など、約 40 名の参加者を前に小林正幸理事が無施肥栽培に関して講演させて頂きました。

小林理事は、無施肥栽培の特徴について、無施肥栽培と有機栽培との違いを交えて説明した後、環境の保全、食の安全などの面からも、無施肥栽培が注目されていることや、施肥することによって作物が病虫害を受けやすくなり、農薬を使わざるを得なくなるのに対して、無施肥栽培の場合は作物が健全に生育して病虫害も少なくなることを、過去の事例を交えて話させて頂きました。参加者からは、植物残渣の圃場外への持ち出しや除草方法など、栽培の実施面に関する質問がありました。

無肥研では、今後も無施肥栽培の普及・啓蒙のため、全国各地において、生産者や流通関係者、消費者など幅広い方々にお話させて頂けるように努めてまいります。



3. きょうと地域力アップおうえんフェア（2018年3月4日）



2018年3月4日（日）に京都市役所前の地下街ゼスト御池で、社会や地域に貢献するNPO法人が日頃の活動内容を、楽しく・分かりやすく紹介するためのイベント「きょうと地域力アップおうえんフェア」が、京都市の主催で開催されました。無肥研も参加させていただき、活動紹介のパネルの展示や、チラシを配布するとともに、米・茶・タンカン・レモンなどを販売し、無施肥栽培を紹介させて頂きました。会場内の特設ステージでは、小林正幸理事が10分間にわたって、肥料や農薬を施さなくとも土には本来作物を育てる力があり、その力を生かして栽培した安全で安心な作物を生産し、提供できるように様々な分野で活動する無肥研の紹介や、肥料を施すと作物は軟弱になり病虫害に遭いやすくなるので慣行栽培では農薬を使わざるを得なくなるなどの話をさせて頂きました。



無肥研のブースに来られる皆様は肥料・農薬が体に悪いとはお考えのようでしたが、さらに肥料や農薬を一切施さずに作物ができるとを説明すると多くの方が驚かれていました。今後は、興味なく通りすぎる方にも、興味をもって頂けるような展示や案内の方法を検討することが課題になると思われました。

4. 理事長に堀江武氏が就任（2018年6月）

3月の総会において選任された新しい理事（任期は2018年6月1日から2020年5月31日）による初めての理事会が6月1日に開催され、定款に従い理事の互選により新しい理事長に堀江武氏を選任しました。



【堀江武氏のプロフィール】京都大学名誉教授・堀江武博士は、1965年に京都大学農学部を卒業後、農林水産省の研究機関を経て、1985年に京都大学農学部教授に就任され、定年退官後は、2006年から2014年まで農業・食品産業技術総合研究機構の理事長として、日本の農学研究の発展に寄与されました。本年（2018年）「アジア稻作に及ぼす地球温暖化の影響に関するシステム農学的研究」で日本学士院賞を受賞されましたように、氏の業績は、日本の農学にとどまらず、地球規模での温暖化と食料問題の解決を目指す研究に活用され、先導的な役割を果たしています。氏はアフリカ稻センターや国際稻研究所などの国際的な研究機関で役員を務められ、また日本農学賞をはじめ多くの賞を受賞されています。

堀江氏は、これまで無肥研の研究報告会で、研究活動に有益な助言を与えられるとともに、世界的に見ても貴重な研究対象である無施肥栽培圃場の農学的知見を得ることの重要性を強調されるなど、無肥研活動に積極的に貢献されてきました。これからは理事長として、無肥研の活動をさらに発展してくださることが期待されます。

なお、白岩立彦前理事長は、2018年に日本作物学会会長に就任されたことから、無肥研の活動を推進するのに十分な時間がとれなくなることを懸念され、理事長を退かれて理事として無肥研の活動を監督してくださることになりました。

★今後の行事予定

2018年8月26日（日） 圃場見学会【予定】

（京都府宇治市小倉及び滋賀県野洲市の無肥研試験圃場や会員圃場）

詳細は決定次第ご連絡させていただきます。

11月18日（日） 農産展・試食懇親会

2019年3月17日（日） 総会・研究報告会・懇親会

・以上の他にも各種イベントの開催を検討しています。行事の詳細は、開催1ヶ月ほど前にご連絡させていただく、ご案内及びホームページでご確認ください。

会報についてのご意見を、
郵便、FAX、e-mailでお
寄せ下さい。皆様のお力で
会報を充実させていきたい
と存じますので、ご協力の
ほどお願い申し上げます。
(編集担当)

〒606-8311 京都市左京区吉田神楽岡町106-2

特定非営利活動法人 無施肥無農薬栽培調査研究会

e-mail : mail@muhiken.or.jp FAX : 075-751-0368

URL : <http://muhiken.or.jp/wp/> Facebook : <https://www.facebook.com/muhiken/>